平成 28 年 6 月号　№476

なかま

発　行
佐倉市立中央公民館
編　集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鏑木町 198-3
電話（043）485-1801

古希を迎えて---------- 長谷川祐作
マウナ・ケアと天文台-------- 波塚　武
趣味が高じて…---------- 天野　和邦
Ｔ先生　安らかに---------- 川口　弘子

竹林と坂道と椿の佐倉

春日　良子

私小説『死の棘（とげ）』の著者島尾敏雄が佐倉に住んでいた。江原台在住の作家高比良直美は佐倉に限定し、取材した。見えてきたものを『椿咲く丘の町』で執筆した。

『死の棘』は、夫に浮気された精神に異常を来した妻を描いている。島尾敏雄・ミホ夫婦は、美男美女である。敏雄は長身で女性には好かれただろう。これが夫婦の悲劇の原因になっている。敏雄には複数の愛人がいて、その１人が佐倉の借家へ押し掛けてきた。ミホと愛人は口論になり大騒ぎになってしまう。一家は１ヵ月程で引っ越した。

島尾一家の佐倉の借家は、味噌屋の横道を入った竹林の中にある平屋の一軒家だった。庭に、白椿があったようだ。

島尾は『死の棘』の中で佐倉を「竹と椿の多い町」と表現した。椿は温暖で湿気の多い気候が適している。真っ赤な色が、椿らしいだろうか。武家屋敷通り裏に、珍しい黒椿が１本ある。葉は小さく、花びらは暗い赤色である。桜のように一斉に咲く華やかさはないが、冬でも青青と葉を茂らす椿は好きである。ぽろりと落下する椿は、城下町佐倉の象徴としては、好まれないのだろうか。

高比良さんの取材した後を、自分の視点で巡ってみた。

島尾一家が居た、横道を入った坂の途中で見上げると、斜面に白椿が咲いていた。杉に絡みつくように、籔の端で咲いていた。普通の白椿だが『死の棘』の場面にあったかと印象深かった。この坂の名前は分からないが勝手に〈島尾の坂〉と覚えよう。

坂を下りたところで、70代位の２人の女性と出会い、話し掛けてみた。昔、近所の人たちで竹林を切り開いて造った坂道で、人一人が通れる程の幅であったようだ。坂の前も竹林が広がっていて、竹林と道の境目の溝にはサワガニがいた。マンションが建ってサワガニがいた溝は、厚いコンクリートの塀になって「不動作緑地」の看板がある。

佐倉の坂道には竹林が多い気がする。竹林の中を坂道が通っていると、遠近法で短い坂道も遠くまで続いているように見え、風情ある風景になっている。梅雨に向かい、ますます笹の葉の緑が、色濃く生い茂り、風が吹くと波の様な動きがあってきれいだ。佐倉の坂道は下るのではなく、上がったほうが断然よい。

万葉集に「つらつら椿つらつらみて…」と歌がある。雨降りの静かな町を、つらつら歩いてみたくなった。

（編集委員）

古希を迎えて

数日前に古希を迎えた。現在の日本では古希を迎えられることは決して稀なことではない。この年まで入院もせず元気に過ごせたのは、本当に幸福なことだと思う。２人の娘たちが、古希の祝いを計画してくれているらしい。子供の成長と共に心配や気遣いをしてもらう立場になってしまったことには、少々複雑な気持ちと感慨がある。

図書館から予約していた本の用意が出来たとの連絡を受けた。数カ月も経っていたので予約したことも忘れかけていた。篠田桃紅の『一〇三歳になってわかったこと』という本である。予約があるために返却期限の厳守を求められた。内容が読み易かったこともあり、１日足らずで読み終えた。「頼らずに、自分の目で見る」の章は自分を顧みるよい機会になった。特に次の言葉が心に残っている。ある美術評論家の「絵には作品名がないほうがいい。作品名があると、見る側がそれに左右されてしまう。自分の目で判断しているので、僕は展覧会へ行っても、作品名は見ない」

私たちは選択基準を評判や評論家の書評に頼りがちだ。人の意見に左右されることなく、自分の目で見たり、感じたりすることは日々の生活でも重要なことだ。自己の判断の中にこそ、出会いの感動や学びの喜びがあるはずだ。

市民カレッジ生活も間もなく終わろうとしている。これからは自由な時間がさらに増えるだろう。市民農園と図書館通いに精を出そう。作物づくりは正に自分の判断力そのものだ。また、本との出会いも大切にしたい。最初の出会いは絵本や童話だった。それらをもう一度手にしてみよう。

（王子台　長谷川祐作）

趣味が高じて…

無事「古希」を迎える事が出来ました。残された時間はそれ程ないはず。何か生きた証を残したいと考えています。無理せず、楽しく成果を得られるものと考えた時、好きな歴史と古地図に行きつきました。約15年前に試みた「臼井宿回顧録」の全箇所踏破が火付けとなり、志津公民館での「しづ学入門」「同研究科」を約13年間学ぶと共に八千代郷土歴史研究会会員になり、八千代市内の全道標踏破と新発見に明け暮れる一方、散策の会を主宰し千葉県内の田舎を歩きまわり、途中の神社仏閣、石仏を楽しみました。

昨年夏に自由人となり、市民カレッジに入学し、これまでの志津地区から佐倉市の郷土史、特に石仏を学びたいと考えました。昨年は庚申塔と道標に絞り市内を歩き続け８月にはすべてを調査表に落とし込みました（刻字写・採寸・撮影）。現在製本化作業中です。既存石仏調査書に誤字・誤記・脱落が多く満足出来なかったからです。製本後は市内図書館・公民館に置いていただき石仏愛好家の基礎資料にして頂こうと思っています。

今年度はカレッジ２年生として「まちづくり」を提案せねばなりません。現在「路地裏から見た佐倉再発見」（仮称）を題目に仲間を募り、路地裏から新たな佐倉発見を試みたいと考えています。どのような発見があり成果を得られるのか楽しみです。

更に、庚申塔、道標調査に続き、再来年度は馬頭観音を調査し製本化を考えています。趣味が高じ三つの課題調査と好きな散策の為新しいコース作りをし、散策仲間に素晴らしい郷土と石仏をご紹介続けたいと考えています。その内に新しい生きがいを見つけます。

（上座　天野　和邦）

マウナ・ケアと天文台

皆さんが御存じのハワイ諸島の中で最も大きな火山の島ハワイ島。この島にあるハワイ諸島の最高峰マウナ・ケアの山頂近くには、世界で最も天体観測に適した場所の一つという事で、13基の天文台が設置されている事は日本でも多くの人に知られている。

そして今この場所に日本、米国、カナダ、印度、中国が新たに14基目の天文台と称して30㍍望遠鏡を設置するＴＭＴ計画が進められている。

しかし、この計画がネイティブハワイアン（ハワイ先住民）を中心とした人達が建設に反対して裁判が行われている事はあまり知られていない。

もともとこの山は、日本人が八百万（やおよろず）の神を信仰し自然も大切にするように、ハワイ先住民にとっては神聖な山であり、本来は侵すべからざる場所であるが、世界の科学の発展に寄与するためにとの事で、地元との話し合いで、自然破壊を最小限にする事で13基に限定して建設されたのである。

そんな話を現地で耳にして実際にこの山に登った時、何ともいえない、心が洗われる気持ちになり、はたして科学の発展の為との事で地元との約束を反故にしてよいのであろうかと考えさせられた。

かけがえのないこの島の自然と先住民の思いを大切にしていきたい。そんな気持ちになるのは、おそらく私一人ではないと思う。

そして今、自分が生きている現実の社会の中で、自然を守る事の大切さを改めて思い、少しでも環境保護活動のお手伝いが出来ればと思う今日この頃である。

（中志津　波塚　武）

Ｔ先生　安らかに

松飾りがとれた日に旧友のＭ子さんから電話がありました。小学校の時の担任であったＴ先生の訃報でした。

97歳と高齢でしたが、自宅で静かな最期を迎えられたとお通夜の席でうかがいました。

Ｂ29の空襲で焼野原となった千葉市で2年生から卒業まで教えを受けました。卒業後も年賀状や暑中御見舞での交流を続けておりました。

10年程前に先生にお会いしたいという10人が集いミニクラス会を開きました。先生は三脚まで持参くださり、猪（いの）鼻山（はなやま）の母校跡地の記念碑の前で写真を撮ってくださいました。夏休みに鋸山や清澄山に連れて行ってくださったことなど、小学校時代の思い出話に花が咲きました。ザラ紙に黒塗りの部分がある教科書が、色刷りのきれいな教科書に変った時代です。

軍国主義教育から１８０度転換した戦後の民主主義教育に、先生方は大変な苦労があったことを後年知りました。

世の中、みんなが貧しかった時代でしたが、私たちは仲良く勉学に励みました、納得のゆくまで調べて自分の考えを持つこと、他人の意見にも耳を傾けることを学びました。

近頃、子どもたちの置かれている環境を思うと胸が痛みます。幼い我が子を傷め死に至らせるなど、許すことはできません。未来を託すべき子どもたちは宝です。社会全体で健全な子育てに取組まねばと考えます。

私の小学校での経験は、深く心に刻まれて、いつも心の支えとなっています。

先生ありがとうございました。ご冥福をお祈り申し上げます。（追記、２月２日付、正六位に叙せられました。）

（鏑木町　川口　弘子）

６月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の２ページと３ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。**「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」**など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650 字（13 字×50 行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先
佐倉市立中央公民館　TEL: 043-485-1801　FAX: 043-485-1803
〒285-0025 佐倉市鏑木町 198-3
E-mail: chuo-public@city.sakura.lg.jp
URL: http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

『なかま』は佐倉市民カレッジの学生と卒業生で構成される編集委員が編集し、市民カレッジ情報コースの卒業生が文字入力を行っています。

さくら道

私はカレッジ 23 期生。３年にはクラス編成があるので、今後の親睦のため旅行が計画されました。

参加者 22 名、クラスの半数がサロンバスで伊香保温泉一泊の旅、平均年齢 60 歳半ばの男女、いえジジ・ババの旅です。全員が揃うと早々に宴会モードに、前途はいかに。

桜の開花にドンピシャ、車窓もピンクの大波が次々と、まるで我らを待っていたかのよう。誰か言わく「電話しておきました」お蔭様で赤城南面千本桜を、ゾロゾロ 22 名が上機嫌。ハッピーな気持に。遠い昔こんな事が、いえそれ以上に皆の顔に、仲間作りの充実感がありました。

経験から立案、下見、添乗員までやっていただいた方の一言、「こんなに緊張して、しんどかったのは初めてです」その一言で我らの旅のご想像を…。

（吉住　清子）

あとがき

佐倉市民カレッジの平成 27 年度卒業式が 2 月 13 日に行われ、私達 21 期生は沢山の思い出を胸に卒業しました。

そして、5 月 14 日には平成 28 年度の入学式があり、25 期生の皆様が入学されました。おめでとうございます。

カレッジでは、佐倉市の市政・環境・福祉・歴史など多岐にわたる項目について学びます。加えて、スポーツフェスティバルや文化祭という、仲間づくりに最適の楽しい行事もあります。

『なかま』はカレッジ発足と共にスタートし、途中一度も休むことなく現在に至っていますが、この記録を伸ばしていくためには市民の皆様やカレッジ生の皆様からのご投稿が頼りです。

日常の生活やカレッジ生活で感じた事、体験した事、またご意見等を気軽にお寄せ下さい。

（猪俣　民子）